

## 「植生」を考える



### 植生の定義

地表は、森林・草原・耕作地・植物の少ない荒原などは緑色植物で覆われている。その景観全体をまとめて「植生」といいます。植物は環境に支配され、気温・湿度・光・土壌など安定した生態系のもとで群落をなします。

### 世界と日本の植生の比較

国内の植生では、森林・草原・農耕地など緑の植物分布の面積は全体の93.5%で森林は67.1%である。これを世界の植生と比較すると（OECD1995年データ）

- ①アメリカ合衆国32.6%    ②イギリス10.4%    ③フランス27.4%  
④ドイツ29.9%    ⑤カナダ45.3%

以上と比較すると、日本の植生分布は非常に高い数値が出て、なんとなくうれしい気がする。ただし、自然林と自然草地の自然植生の合計は19.1%で20%をきっている。このうちの58.8%以上が北海道に集中している。

近畿から西では、自然植生は山頂付近と半島、離島に点在しているのみです。全体の割合では、自然度の高い植生25%、二次林・二次草原25%・人為的成立の植生25%土地改良の進んだ植生（農耕地・市街地・造成地）25%と、4等分となっているが、昭和58年から61年調査では、自然植生・二次林は減少し植林・市街地・造成地は増加傾向です。

### 自然植生

国内で人手の入らない植生はほとんどないが、日本アルプスなど、山岳地帯の中腹から頂上に、わずかに残っています。それらは地域の環境に適応して、植物群落をなしているはずですが、それらの群落を「自然植生」または「一次植生」といいます。代表的な植生群落は、

- ①西日本のシイ・タブ林、モミ・ツガ林    ②東北地方のブナ林  
③亜高山帯のシラビソ・オオシラビソの群落    ④高山帯のハイマツと高山植物の群落  
⑤北海道のエゾマツ・トドマツの林

があります。日本の自然植生は世界的にも極めて珍しく、屋久島と白神山地は世界自然遺産に登録されています。

### 二次植生

自然植生に人間が手入れする植生を、二次植生または代償植生という。国内では次のような植生が実在する。

- ①20～30年おきに伐採された武蔵野の雑木林    ②落葉と下草の手入がされたアカマツ林  
③牛の放牧に手入れされたシバ群落    ④野焼きと刈取で利用されたススキ群落

### 植生と人類のかかわり

ヒトの誕生から約400万年、人類は植生と生態系のしくみの中で生きてきた。戦前まで、ブナの森は広い地域で残されたが、第二次世界大戦後、都会の復興の資材として切り出された。その後の高度成長とパルプ資材や植林ブームで邪魔物扱いにされ、多くが姿を消した。西大台ヶ原や、身近な段戸裏谷原生林など、保護原生林に指定された植生もあるが、その60%が消滅した。

縄文時代、ブナの森は主食となるトチやクリなどの木の実の「食料倉庫」として利用され、東日本に人口が多かった。縄文時代の遺跡の80%がブナ帯で発見されている。その後紀元前3世紀頃から始まる弥生時代では、西日本で二次植生に含む稲作が始まり人口は西日本に流れた。最近では、地球の温暖化により、生態系と植生の分布に狂いが生じている。緑のダムとして注目を集めるブナの森は、今、森林セラピー（療法）や健康管理と憩いの場として注目を集める。